

クラブント 旅の追憶

つい先日、東京の鷗外記念会からある問い合わせがあった。それによると、森鷗外全集の中にはないが、かつて鷗外が翻訳したというクラブントの原作を探しているという。私はその原作を見つけることができなかったので、そのお詫びにひとつ報告記事を書きたいと思う。

五月末、私は自分の先祖を辿るため、東ブランデンブルク（今日でいうところのポーランド）への旅を計画し、その中にはクロッセンという名の町（今日ではオーデル川沿いのクロスノと呼ばれている）も含まれていた。

この町は、鷗外が1915年「沙羅の木」に、合計11作の詩を紹介した詩人が生まれ、そして葬られた場所であった。彼の本名はアルフレッド・ゲオルク・ヘルマン・ヘンシュケという。1890年11月4日、オーデル川沿いの町クロッセンの薬局の家庭に生まれた。地元のギムナジウムに通い、後にフランクフルト・オーデルにてゴットフリート・ベンと席を並べ学ぶようになったヘンシュケは、大学では自然科学を専攻したが、のちに演劇学と文学に転向する。反社会的な詩を書いたことで、検察庁の役人の怒りを買って、他の人物になりすますため、父の友人の姓「クラブント」を名乗り、詩人としてもこの名前で活動することになる。その後、このペンネームを、「船の精」という意味の「Klabautermann」と「バガボンド Vagabund」を取って組み合わせたものだと説明する。故郷との結びつきを大事にしており、プロイセンの国境住民としての自覚を持っていたという。

1928年8月14日、ダヴォスにて永遠の眠りにつく。享年38歳という、短すぎる一生で、彼の作品を初めて日本語に訳した鷗外と同じ病気、結核に悩まされていた。彼の灰は1928年9月9日、故郷の墓地に葬られた。弔辞は彼の友人、ゴットフリート・ベンが読み上げ、多くの参列者と町に感謝の意を表明した。1930年5月、クロッセンはクラブントが眠る地に記念碑を建てた。国家社会主義の時代、彼の作品は発禁処分となった。

「クラブントの墓を将来にわたってずっと手入れし、守り続ける」とは、市長の約束であったが、1945年に突然の終わりを迎える。敗戦によりドイツ人住民は追放され、墓石は引っっこ抜かれ、あらゆる記念碑と墓地の礼拝堂は叩き壊されてしまった。当時の証人と、測量用の地図により、以前のクロッセンの住民

が、クラブントの墓の位置を探し当てることができた。そこには今、戦争による被災と環境汚染を乗り越えた、古い檜の木が根を下ろしている。

今日、クラブントの世界を覗くには、彼の作品、詩集を探すしかない。かつて彼が讃えられた地にはもう何も残っていないのだから。しかし、クラブントの作品は鷗外により日本に紹介された。ある独文学者がこう言ったことがある。

「鷗外による訳はあまりにも完璧で、クラブントはアジア人だったのではないかと思えるほどだった」しかし実際に、クラブントは第一次世界大戦の最中、集中的に中国と日本の詩歌、および戯曲を研究し、「日本の文芸作品」という題で本を出版したほか、ヘッセなど同時代に生きた文学者と同じく、仏教や道教の教え、生まれ変わりの思想に従事した。若きブレヒトにインスピレーションを受け、東アジアにも興味を持っていた。ブレヒトの「コーカサスの白墨の輪」は誰もが知っているが、クラブントによる「白墨の輪」がその前に存在していたことを知る人は少ない。1925年、マイセンでの公演が成功を収めたのを皮切りに、百近くのドイツの舞台で演じられ、クラブントに富をもたらした。

クラブントは創造力にめぐまれ、政治的意識が強く、快樂主義かつ頭の切れる人物で、生前はよく噂され、悪い評判が立つこともあり、第二次世界大戦以降は人々に忘れられがちであった。また、友人にはフランク・ヴェーデキント、エルヴィン・ピスカートトア、ブレヒト、フランツ・ヴェルフエル、マックス・ラインハルト、エーミル・オーリックなどがいた。

鷗外が、自分よりもはるかに若いクラブントに何故そこまで注目したのか、私はぜひ知りたいと思う（クラブントが最も精力的に作品を生み出した1920年から1924年頃）。もしかすると、フリッツ・ルンプを通して知ったのだろうか。1915年、クラブントの肖像画が、ルンプの弟子エミール・オーリックによって描かれた。オーリックは1895年に結成されたベルリンの文芸誌「パン」の中心人物であり、二十一歳のときに初めて日本に来たフリッツ・ルンプは、1908年から1912年まで続いた、東京の「パンの会」の会員にもなった。彼が大分の収容所に居たときに書いたわずかな記録と、数枚のハガキでしか知ることはできないが、どうやら鷗外や木下杢太郎とも縁があったようである。「パンの会」の発起人であった北原白秋は「(ルンプは) 軍事探偵のやうだから気をつけるやうにと鷗外先生から後で注意を受けた」と、初めての対面を記録している。

鷗外の遺品にクラブント作品の「Morgenrot! Klabung! Die Tage dämmern」訳がある。クラブント全集が置いてある、ベルリン・アカデミー・デア・キュンステ（芸術）の資料室には、何のヒントも残されていなかった。書簡のやりとりなども見られない。ひとつ確かなのは、クラブントが学校に通っていた頃から左右の肺に結核を患っていたということだ。いつ幕を閉じるかわからない、残り少ない人生だっただけに、生きようとする力は強く、好きなことを追求したのだろう。

1924年、クラブントはミュンヘンの路面電車の中で女優カローラ・ネーアーに出会い、翌年に結婚した。夫婦の関係を保つのは、鷗外同様に難しいものであったらしく、小説「銀の女狐」で、破綻した結婚生活を赤裸々に語っている。クラブントがこの世を去ったとき、カローラはベルリンで「三文オペラ」の舞台に立っていた。その後、彼女はプラハにて、ヒトラーに反対する коммуニストのサークルを結成する。1936年から41年にかけて行われたスターリンの大粛清により10年の懲役を命じられる。1942年6月28日、ソル・イエツクの懲罰収容所でカローラは息を引き取った。

カローラは、クラブントの遺作を整理し箱の中に入れ、ドイツを去る際に知人にこれを預けるまで、ずっと手元に置いていたという。しかしこの遺作も、戦火を免れることはできなかった。

死を間近に控えたクラブントは、墓石に刻む文章を自分で残した。その内容は鷗外を少し憶い出させるものである。

「彼は人間であり、それ以上でも、それ以下でもなかった。幼少時代に患った病によって、生きる前から既に死んでいたようなものだった。しかし、生前に書き残したものが、その後も彼に代わって生きてくれることを望んだ。何百万人もの人間は、白紙を手にして墓場へ向かう。しかし一言だけでもいい、彼の言葉が永遠に残るのなら、彼は不死となるだろう」

„Er war ein Mensch, nicht weniger, nicht mehr. Er starb bevor er starb. Möge er leben, nachdem er lebte. Millionen gehen mit einem leeren weißen Zettel zu Grab. Bleibt nur ein Wort von ihm für die Ewigkeit, so lebt er unsterblich im Liede des menschlichen Leides...“

今日のポーランドにあたる東ブランデンブルクから、ポストカードに代えて、このメッセージを送りたい。